

自分らしくていいんだと思えたら大成功なんです

←豊岡市円山川公苑での「だるま森ヘンテコ大博覧会」2017.8.26



脱原発や避難者支援、反戦、そして

障がい者や在日の問題にも深くかかわる「総合工作芸術家」

だるま森十えりこさん

神戸での脱原発集会などでよく会うだるま森十えりこさんは、31歳で関東から実家のある神戸に避難してきたアーティストの夫婦で、「総合工作芸術家」と称しているように絵・映像・音楽・芝居、またそこで使う独自の楽器も手作りするという多角的でオリジナルでもおもしろいアートの表現活動をしている。改めて彼らに取材させてもらうことになり、神戸の下町、長田にある自宅兼工房を訪ねた。ところせましと芝居で使う小道具やオリジナルの楽器が置いてあり、それに囲まれて野菜たっぷりの美味しいランチをごちそうになりながら、ゆっくりお話を聞かせてもらった。

(あ)

◆スーパーリアリズム

— 二人はいつどこで出会ったんですか？

えりこ (以下 え) ● 35年くらい前ですね。1982年かな、南青山で。そこにだるま森のいた会社があったんです。小さな広告代理店に拾われて、「ガテン」という雑誌を出したところなんです。そこのアーティストでした。

だるま森 (以下 だ) ● デザイナーじゃなくてアーティストだったんだけど、デザインもやらされてイラストもやらされて、写植屋さんにも行ったり。まあ修業時代です。若い小僧っこだったんです。

— 絵はその前から描いてたんですか？

だ ● もともと絵本を描きたくて、いちおう落合恵子さんで賞を頂いたりして、それがきっかけで東京に出て売り込みしてたんだけど、まだ20そこそこで人生経験とかもなくテーマを見つかるどころじゃなくて、絵を描くので必死で、それでちょっと食いつなぐためにしばらく大人の男性雑誌でヌードを描いてたんです。スーパーリアルも描けるのでけっこう評判よかった。そのあとエロ小説の挿絵とかも描いてて、めっちゃおもしろか

ったですよ。小説家の先生のところに行って取材したりして。けっこう真面目な人が多かったな。それで編集部で出会った人が広告代理店に連れて行ってきて。

話しはそれるけど、スーパーリアリズムの手法を僕らの時代はみーんなやってたのね。それがやれないと仕事にならないから。

— スーパーリアリズムって具体的に言うとはどんなものですか？

え ● パルコの昔のイラストとか。

だ ● 昔の写真はエッジがぼけちゃったりして今のように写真自体迫力つけれなかったのでぜんぶイラストでやっていて、強調してすごい力強い広告にしてたんです。コココーラとか、あれもぜんぶイラストだったから。日本でスーパーリアリズムというと、いわゆる広告アートと言われる範疇で、それが仕事になっていって、僕もそこにいたんですよ。いろんなものを写真みたいに描ける技術を習得して。でもそれはパソコンの時代になってどんどんすたれていくのね。それで今の若い子でスーパーリアリズムを描ける子はほんとにいなくなっちゃったけど、でも今外国からこんどは波が来てる。パソコンののっぺりした偽物っぽいかんじよりも、自分の手の息吹の入ったリアリズムが。

もともとスーパーリアリズムというのはアメリカのモダンアートから始まった言葉で、僕らが目にするのはせいぜい写真みたいな絵が載ってる画集じゃないですか。僕もああこういうことだと思ってたんだけど、ほんとのスーパーリアリズムの原画を見るとぜんぜん違うわけ。画集のようにちっちゃくすると写真だけど、実物は5mもあるようなキャンバスに人の顔を描いてたりする。近づくと、点点点のドットが、たとえば紙を丸めてそれを連ねてるのが、遠くから見ると写真のように見えるとか、もう根本的にスーパーリアリズムがぜんぜん違う。アートと広告業界のとらえかたが、で、僕としてはもうぜったい本場のスーパーリアリズムの成り立ち、トライの仕方がおもしろいから、そこでガラガラっと広告アートというのは僕の中で崩れていった。めっちゃくちゃおもしろいことやってて、自分は世間知らずだったなーと思った。

— アメリカに行ったのはどうして？

だ ● 最初は独身の時に広告代理店の社長に拾われて、デビュー前だったので、アメリカに行って絵を描いてこいっておぼり出されたんです。そこで絵を何枚か、宿題で描いて戻ってこいって言われて。それで一人でニューヨークにいて絵ばかり描いてて、美術館をまわったり、試行錯誤してたんです。今から思え



ばほんとに若造で、レゲエのミュージシャンとかえらく濃いところの口フトに住んで。

そのあと日本に戻ってきて、エロ雑誌とかぜんぶやめて広告代理店だけにしておいて、ギャラリーで企画たてたり自分の絵を描いたりしてたんです。そこにえりちゃんはお客さんで来たんです。

— それでお互いピン！と来た？

だ● えりちゃんは僕のことをゲイだと思ってて、それはそれでいいやーと思ってた。えりちゃんはその時ファッションデザイナーでブランドにいて、就職したてだった。僕はデビューしたらとたんに不安に襲われて。

え● デビューは銀座のソニービルの壁面に大きなキャンバスを作り、ゴンドラに乗って1週間そこでライブペインティングしたんです。ライブペインティングアーティストとしてデビュー。まだそういう人いなかったよね。

だ● いくら近くってもでかい構図が描ける才能があったみたいで、それだけは助かりました。ぜんぜん平気で描ける。

◆ニューヨーク暮らし

だ● そのあと結婚してからすぐ二人でアメリカに5年半行くんですけど、その前には僕もデビューして毎週のようにポパイとかブルータスなんかの若者雑誌からポップアーティストとしてインタビューされるようになって、いろんな派手な仕事もやってたんです。

だけど僕は明らかに嘘を言ってるのね。インタビューされても受けるようなことを言っていて、自分を大きく大きく見せてた。その頃は自分の作品に自分でも力を感じないんだけど、自分のアイデンティティとかポリシーとかテーマとか何にもできてない状態で、それでも日本というのは仕事になっていけたんですよね。その頃は。アートバブルというのか。それは重々分かってるし、僕はこのままだときっとあと10年できるかどうか分からない。5年もわからない。会社の中で机ももらったし世の中に名前も出たし、南青山に部屋をひとつだけたんです。そこを自由に使って僕の工房になってたんです。でも僕は、きつとこのままやっても3年もたないと、初めてその部屋に座った時に思ったんです。すごく不安で華やかな日々を送っていたんです。

で、あるとき、ジャズトランペッターの近藤等則さんと一緒に飲みに行っていた時に、「もっとハングリーにならないといけないうね。ニューヨークでも行ってくれば？」と言われたんです。たしかに図星なんだよね。ラッキーでとんとんとんといっちゃってたから。それでその場ですぐ真に受けて、明日会社やめる！

て言ったんです。

え● 新婚なのに！(笑)今もぜんぜん変わってないです、勝手なところが。

だ● なんでかという、自分が不安症候群みたいになって、日本が嘘っぽく見えてたというのか。で、アメリカでもういっぺん試そうみたいなことを考えて行ったけど、やっぱり日本であれだけちやほやされてたら、なかなかそのクセはとれなくて、発表活動もしつつお仕事はじめたのが3年目。こんどはほんとの現代美術なんですよ！現代美術の版画工房で人を募集してて、その職人さんをやることになったんです。版画のことはぜんぜん知らなかったんだけど、職人さんのチーフをやることになって、最終的にはそこでワーキングビザも取ってもらえたんです。

でもその頃ちょうど湾岸戦争になったんです。一度パスポートの書き換えに半年ほど日本に帰っている間に湾岸戦争になって、久しぶりにニューヨークに戻ったら冬のさなかで、殺伐としている感じで、ジミヘンとかジャニス・ジョプリンが歌ってた有名なトンプキンズパークとところが下町にあって、そこにホームレスの人たちが寝泊まりしてたんですけど、封鎖されてみんな追い出されちゃって、それでどちらからともなく「日本に帰ろうか？」って話して。

え● そう、久しぶりにニューヨークに戻って3日目に、公園のブランコに乗りながら同時に「帰ろうか」って言ったんです。(笑)戦争をしかける国で、勝った勝ったとって凱旋パレードとかやっちゃって、まわりのアーティストも黙っちゃってるし、アートも何のためのアートかわからない。

だ● ごごごごってみんな右に傾いて行ってるの。スタッフの若い子たちがアメリカ国旗振ったりして。それを目の当たりにしてね。

え● みんなが戦争を起こしてるってことに動じてないのがすごくいやで、そんな国にはいれないと思って帰ったんです。その国の人間になろうと思ったら、もっともっと深刻ですよね。だから私達は気楽な部外者だったんだなーと思いました。

— 永住しようとは思ってなかった？

え● いや永住するだろうなーくらいには思ってたんですけどね。日本とはちがう住みやすさがあってたんで。誰もそんなじろじろ見ないし。やっぱり日本より幅がありますね。日本よりとんでもないところもあれば。

◆「総合工作芸術家」

— 楽器はその頃から作ってたんですか？

だ● ニューヨークで本格的に楽器づくりをはじめました。高校時代からやってたんですけど、アメリカの工房には電動の工具がぜんぶあったから、仕事終わってからそこで作るようになって。でもその頃は楽器の構造をモチーフにした作品をつくってたんです。楽器ではなくて楽器モチーフの美術作品として。

え● 舞台道具を作るようになったのは最近ですね。1999年くらいから。二人ではじめたのは2003年くらい。

— さいしょは絵を描いていたのが、だんだん立体的になったりパフォーマンスと一体となっていったわけですね？

え● そうですね。なぜ「総合工作芸術家」って言うかといえば、当時マルチアーティストという言葉が流行っていたけれど、総合芸術家っていうとなんか大それたかんじで上から目線でいやだったので、工作が大好きだから、「工作」を入れてみたんです。そしたらいきなり身近になった。(笑)

— 楽器のようなものを作り始めたのはアメリカで、それから実際に楽器として使えるものはいつごろから？

だ● はじめニューヨークでアフリカンダンスを習いに行っていて、アフリカンハーブがすぐできたから、日本人は一人だけだったけどサークルに入れてもらったんです。アフリカ人のコミュニティがあって。そこでいろいろジャンベとかダンスとかお料理なんかもするコミュニティで、毎週行ってました。

— 「ハルオンハーブ」と言っていますが、それはどういうところから？

だ● もともとはアフリカンハーブの手作り版からはじまっていて、そのアフロアメリカンの長老にもう日本に帰るんだと話したら、この音楽は俺たちの音楽だからおまえは自分

↑神戸アースデイトにて、真っ赤なテントの下で紙芝居をするだるま森とえりこさん。2018.5.5

してくれて、それで3人で住み始めたんです。ケンカばかりして。でもその会社は結局そりが合わなくてやめて、それで劇団をはじめたんです。それが2000年ころのことです。プロの劇団としてやりはじめたのは2004年からです。うちはプロなんですよ。みなさん気楽にボランティアに来てほしいるので、「いちおうプロなんで」と言うんですけど。(笑)

え● オンリーワンだと思ってます。日本はそういうところだなんて思いますね。

だ● カテゴリー化したがる。そうしないと認めない。

え● 知ってるものじゃないとダメだったり、ブランド力がないとだめだとかネームバリューがないとだめだとか、経歴がないとだめだとか、多すぎるでしょ、日本で。そうじゃなくて、今ここで出逢って、どこの誰かもわからない人がすばらしいんだこれって思う感性をみんなが持ってほしいんです。自分たちもそうありたいし、そうでないこないだの日大のアメフトのようになるぞと。誰も責任もたないで。

—— 日大の事件は象徴的だと思いますね。そういう意味ではニューヨークというのは正反対なんじゃないかな。

え● そうですね。とにかく自分の既成の価値観から遠いところに一度行ってみることをお勧めしたいです。距離じゃなくても価値観が遠い人と会って異文化と交流してほしいなって思います。それは国とか人種に限らず、たとえば障がいも私達は文化ととらえています。

◆弱者への共感、社会問題への眼

—— FBの投稿を見てると、障害をもつ人とか在日なんかのマイノリティとか弱者というか、そういう人たちへの共感がありますね。それはどういうところから？

え● そういうのを発信するのは9割くらいが私の方なんですけど、子どものころから社会に対する違和感がいろんな場面であって、思ったことを言っちゃいけなかったりして。

—— 学校も日本の社会自体がそうですね。

え● たとえば原発事故で放射能の影響があるかないかというところから。小さな頃からの違和感の積み重ねが、大人になって自由に自己責任でものを言いたい立場になった。それはどこにも属さない、最小限この二人の単位ですけど、それなら何を言っても自分たちが責任とるしかないんだから、OKになったわけです。子どもの頃から感じてきた違和感は、実はこういう裏があったんだ。こういう社会構造の中から不条理なことが表面化していたことなんだ！自分にも、隣の弱者にも、こういうことだったんだ！ということがどんどん見えてくるじゃないですか。そのことを言っかないと、まだのんびりしてる人もいっぱいいるから。(笑) いや、危ないよ！

—— どういうところでよくやるんですか？

え● 子ども劇場、親子劇場が全国にあって、あと子どもフェスティバル、人形劇フェスティバルとかに出演したり。

—— 劇は前からやりたかったんですか？

だ● はい。舞台上で表現するのはきれいじゃなくて、絵と音楽と手作り楽器とお話という4本柱でまとめた作品ができるんだと。けっこう新鮮な体験で。

—— 絵だけとか音楽だけじゃなくてそれこそ総合的にやるんですね。

だ● 思い返すと、絵だけとか一つずつばらばらでやっているとぱっとしないんですよ、自分でも。でも全部合わせていじると、なかなかこの人おもしろいじゃないって自分でも思える。いいもの作ってるなって。そこまで作るのも準備が大変なだけけど、それをやり終えるとそういうことなんだなってのがわかってきた。絵だけやってもあんまりおもしろくなかったのね。今は絵本だからお話もあるから。舞台上でやろうとしていることは、だんだんパフォーマンスアートに近づいてるのかな。

—— パフォーマンスアートというのは？

だ● 現代美術の中のパフォーマンス部門なんですけど、僕らは境界線のボーダーのところにいる存在なんで、現代美術ほど一般の人がとつきにくくなくわかりづらいものでもなく、わかるんだけどちょっとライブ感覚が濃い。小さい子でもおもしろさがわかるという、それを目指したわけじゃないけど、ぼくらの資質がそうなんです。

え● でも児童劇とか人形劇の人とか同業者の人たちから見ると難解だって言われるし、そんな人形劇じゃ無いって言われたり。ミュージシャンの友だちからは人形劇だねって言われたり。(笑)

だ● こうもりたいな。(笑) どこに行っても浮いちゃうんで。それはそれでいいと。



↑ハルオンハープなど手作りオリジナル楽器がならぶ豊岡市山田山川公苑での「だるま森へんてこ大博覧会」2017.8.26

の音楽を作れて耳打ちされたのがすごいショックだったんです。でもいいショックで、それが一番のお土産だったと。さいごにハグしたまま耳元でささやくの！(笑)それがアメリカに行った意味かなと。

え● そうか！オリジナルをやるべきなんだ、つまりアイデンティティですよ。日本人とは何かという前に自分が日本人であることを忘れていたし、アジア人であることを忘れていたし、自分の文化って何？自分て何？というところから目指すことが出来たんです。

—— ニューヨークに住んでる間はあまり考えてなかった？

え● も〜う満喫して。(笑) ワールドミュージックとかエスニックフードとかもあるし、いろんな価値観があるからすごい勉強になったんですけど。久しぶりに日本に戻ってきた時に、自分のアイデンティティに戻れないとほんとは落ち着かないというか幸せじゃないと気づいたんです。

だ● 自分が作り上げるって大変なことなんだけど、そこまで自分を信用してモノを作っていく始まりがそのアフリカの長老の言葉でショックを受けたことだったんです。そこからすごく時間はかかるんですけど、でもどこに向かえばいいかはわかった。今までのやり方は隣の線路を走っていたようなもので、いつか脱線するんだという不安をずっと持っていた。東京で感じてた不安はいくらアメリカに行っても同じ不安がずーっとあったから。自分を見失っているというか。でもその時、線路を降りるきっかけをもらったんです。

◆日本に帰国して劇団を

—— それで日本に帰ってきて、東京に住んだんですか？

え● 最初は杉並の方南町です。昔のアパレルの先輩から誘われて一緒にアパレルメーカーをやることになり、だるま森にもいちおうアーティストとして在籍してもらって、私の母親が九州から出てきて経理を担当



はやばいっていうのはわかってたんです。で、ついに!と思って、これはもうただ ことでは済まないというのはすぐにわかりました。二人で劇をやり始めてから、フリージャーナリストのサポートも始めたんです。やっぱりそういう生き方をしたいし、誰にも気兼ね無く思ったことを言うことを決めたから、それにはジャーナリストの人を通して

これのできるんだと、大いに勘違いしてもらいたいです。

——勘違いなんですか？

え● その日に絶望してしまったら、二度とやらなくなっちゃうけど、一歩踏み出してほしいんです。

だ● たかだか4つの穴くらいで半音も全部出せるので、「茶色の小瓶」くらいのエンディングは軽くできちゃうんです。こんなおもちゃみたいなもので。

それが直接その子の成長にどうのってことじゃなくて、こういう変な大人がいたってことが30年後とかになんかのきっかけで思い出して、それが次の糧になればいいなって思うんです。長いタームでしか僕たちの役割は果たせないと思う。もしも一人でも役に立てればいいなと。

——ワークショップは楽器作り以外にもありますよね。

↑神戸のアーティストスペースかおるにて。だるま森の「ヘンテコお伽小屋」2016.8.23

って。私達、炭鉱のカナリアみたいに敏感なんだし、

大人になって何でもわかるようになってきたら、要するに日本の社会はすごく生きづらいと。弱者に厳しい。そしてだんだんわかってきたのが、戦争の責任をとってないからだというのが結論です。反省しないで来たからだ。ほんとうに悪い人達を根絶できなかったから。彼らが息を吹きかえしてずーっと暗躍してたり堂々と出てきたんですよ。

——今の日本はこのまま行ったらどうなるんだろうと思うくらいひどい状態ですね。

え● それはでも世界的ですね。ロシアのプーチンとかアメリカのトランプにしても中国の習近平にしても金正恩にしても、世界中に暴君がいっぱいいると思うんです。なんか露骨になってきてる気がします。権力者と奴隷みたいな。イスラエルとパレスチナとか。こないだ会ったウイグルの人たちにしても、肅正肅正で収容所に入れられてどの人も家族が戻ってこないとか。でもそういうことは表だっては言えないと裏で聞いたんです。言ったら中国に送還されて収容所に入れられる。そうすると戻って来れない人がいっぱいいると。でもウイグルのことをネットで検索してもまともな情報の発信がないんです。

子どもの頃に、なんで親は差別するんだろうとか思っていましたけど、分かってきましたね。やっぱり侵略戦争をそのままひきずってるんだって。

ここ(神戸市長田)の地元は在日の人も多くていろんな関係で友だちになり、一緒にカラオケに行ったりお風呂に行ったりとお付き合いさせて頂くようになったので、活動をサポートしたり、そういう人たちに自分たちが一つ番組を担当しているコミュニティラジオ「FMわいわい」の番組にゲストで出て頂いたりしています。

◆311のあと神戸へ

——311のあとに神戸に移ってきたんですね？ その時の話を聞かせて下さい。

え● 広瀬隆さんの「危険な話し」を前に読んでたし、まわりも反原発が多かったから、原発

て世の中の不条理を知っていく必要があると。だからそれは大事な活動のライフワークなんです。

そして3.11の時はその1週間前に鎌仲ひとみさんの映画「ミツバチの羽音と地球の回転」を見たばかりだったので、もう起きたか！まさかねって。それで鎌仲さんが一生懸命みなさんを誘導しようとしてるのをリツイートしたりして、情報発信をしていたんです。ブログとかミクシとかで。そしてDAYS JAPANの広河隆一さんとかJVJA(日本ビジュアルジャーナリスト協会)がこれから東京電力福島第一原発に行くからと。それで注目してたらこれはほんとにまズいなど。

当時は埼玉県川越に住んでいて、その時ちょうど西へのツアーが控えていたんですが、車が修理からなかなか戻ってこなくて、やっと3月16日くらいに出たんです。そして1ヶ月半くらいツアーで西の方に行って、それから今度は北海道に行き、ゴールデンウィークには岩手県の大槌町に行って、それから川越に戻って1ヶ月かけて引越しの準備をして、それでこの神戸の実家に引っ越してきたんです。私としては落ち着いた状態にいったん身を置いて、それから3.11と向き合いたかったんです。だってすごく縁があるいろんな人にお世話になって、みんな東で生きてて、それは放っておけないし。

◆ワークショップについて

——楽器作りワークショップやっていますね。

だ● サックスをつくったりシェーカーをつくったり、紙とかそのへんのものでつくるんですけど、一番大切にしているのは、作ったところで終わらない。楽器というのは使ってミュージシャンの気分を味わって、その次に行ってもらうための道具なんで、必ず最後に演奏していっしょにセッションするんです。なおかついっぴしのミュージシャン気取りに勘違いしてもらえるようなカッコいいことをやるっていうのを大切にしているんです。出来る範囲のところで、せいっぱいセッションして、ストローとかそんなもんで作った楽器でちゃんとしたものをバンと一発かましておいて、



だ● お人形づくりとか絵本づくりもやっています。デビュー前からやっていたんですけど、お芝居やってワークショップやって、またお芝居やって。朝からはじめて夕方くらいまで、10日間くらい、へるへるになるけど、それが僕たちのスタイルなんです。

え● ワークショップをやってよかったねと思えるのは、いろんな生き方があるんですねーと言われたときです。大人でも何人もいるし、子どもだったら不登校だったのに学校に行くようになった子がいたり。あの日が一番楽しかったと言っていますとか。もう10年以上やってると、そういう話をよく聞きます。そのためにやってるようなものです。自分らしくていいんだと思ってもらえたらいいんです。大成功なんです。

INFORMATION

E-mail=dalmamori@gmail.com
https://www.facebook.com/dalmamori/

*だるま森さん達の直近のイベントはp14-15こよみ欄に載せています。
*手作り絵本やカードなど多数あり、イベントにて買えます。
*FMわいわいの番組がネットで聴けます。

→http://tcc117.jp/fmyy/



↑だるま森さんオリジナルの手作り楽器の数々。見てるだけで楽しい2016.8.23

↑絵本もすべて手作り